

19世紀前半のイギリス教育史の予備的考察

— 統治と統計 —

上野 耕三郎

生の政治と人口の知識

1830年代には社会の秩序が大きく揺らいだが、社会問題が何に起因して引き起こされているのか、ということがかならずしも明確ではなく、その性格がきわめてあいまいで、漠然としたものであった。教育についても、まずもって解決されるべき自明な行政的課題があったわけではなく、それに向けてすべての施策が立案されたわけでもなかった。というよりも、教育そのものをいかにして問題として構成するのか、という課題に当時の人々は直面していた、と言った方が適切であろう。言いかえれば、なんらかの施策を施すためには、それ以前に「社会」問題が構成されていなければならなかったし、「教育」が問題構成されていなければならなかったわけである。「社会」調査や「教育」調査が施策の立案に先行していなければならなかったのは、このためである。統治するためには、統治されるべきものがいかなるものであるかを、まずもって情報や統計という形に転換することが前提とされていた。そうした情報や統計が表象する事実に基づいてはじめて、明証性のある確実な知識が形づくられ、社会のなかで宗教的ならびに政治的分裂が生じないように、社会のあるべき方向性について的一致した共通感覚が人々の間で生み出される、と考えられていた。産業社会に住んでいる人々がこのことに最初に気づいたのが1830年代であった。こうして統治のために調査という膨大なしごとが着手され、統治の対象である人々そして人々に関わる出来事が調査の対象とされ、私たちが理解できる形の情報や統計へと変換されていった¹。

1832年の第一次選挙法改正後すぐに、国はさまざまな施策を矢継ぎばやに

うちだすことになるが、いずれの施策も統治されるべき対象の特徴や傾向に応じて統治することをめざしており、そのために「人口」についての知識を累積していくことになる。子どもあるいは教育に関わることに限定しても1836年には出生、死亡、結婚登録が義務化され、「人口」の性格を表象する大きなステップを踏み出すことになった。また1801年に始まる国勢調査の組織化にともない、「人口」の知識が累積され、史上まれにみる規模で利用できるようになっていく。1841年には戸籍本庁（the General Register Office）が設立されて、国勢調査は近代的形態をとるようになり、10年ごとに実施されることになった。1841年以降はその調査はいつそう精緻になり、「人口」についての様々な調査事項を他の調査事項と照らし合わせ、比較し、結びつけることが可能になった。調査事項のなかにも教育調査が組み込まれるようになり、1851年の国勢調査における教育調査は、その信頼性・信憑性をめぐって大きな議論を巻き起こすことになった²。もちろん、教育に関連した調査はそれ以前にも実施されており、内務省（the Home Office）が早くも1810年には犯罪統計を集めていたし、議会では1816年以降、数度にわたって貧民階層の教育に関する特別委員会が組織され、調査報告書が提出されていた。

こうして人の誕生から死に至るまでのありとあらゆる出来事や現象——出生、疾病そして死、人口数やその増減、結婚と離婚、養育と教育の形態、家族の居住形態、雇用形態やその状態、犯罪など——が調査の対象となっていった。フーコー言うところの「生の政治」である。統治の新しい技法としての「生の政治」は、主体の意識に直接はたらきかけるというよりも、肉体の生と死の出来事を媒介にして働きかけるものであり、「人口」の健康を増進し、出生を刺激することを通して作用するものであった。「人口」はその富と福祉が最大限にまで高められるべきであり、そのためには人口のさまざまな出来事や現象は理解可能な情報や統計に変換され、知識として編み上げられるべきであった。言いかえれば、賢明な統治が可能となるためには、統治されるべき出来事や人口についての統計的情報が必須とされ、そのような情報や統計の上に基礎づけられないかぎり、統治の成功はおぼつかなかった、というこ

とである³。

絶対主義国家とポリス

イギリスとフランスでは、19世紀初めに近代的統計が古い「政治算術」にとって代わったが、パスキーノのしごとで強調されているが、統治と知の関係が明瞭な形で現れていたのは、絶対主義国家のなかでであった⁴。17、18世紀にヨーロッパで形づくられたポリスの科学、たとえばドイツのフォン・ユスティらのポリス理論家の著作では、国家の富強はその臣民の数と性質とに大きく依存していることが、暗黙のうちに前提とされていた。当初は統計調査は国家の富を評価し比較し、人口規模、さまざまな商業分野への区分け、課税の問題と国富との関係を検討することに関心を持っていたが、次第に人口はそれ自身の固有性をもっている領域であることをあきらかにしていった。したがって、君主はその啓蒙的統治のためには、人口の状態についての知識にもとづいて、人口（臣民）の生命あるいは健康を保護する措置を講ずるように命じたのである⁵。こうして国家そして君主の権力は、それらの知識に基づいて、合理的な方法で行使できるし、またそうすべきであるという考え方が根づいていったのである。だから、統治の対象とされるべき人々の出来事と現象を数え上げ、書き記すことが求められていたのである。18世紀の人口の管理行政——富、公的秩序、徳そして幸福——では、人口数、生産物、活動、出生、犯罪、死亡、その他のことがら、統治の前提となる知識を編み上げる材料を提供し、その知識に則して統治計算がなされ、それに基づいて統治がなされていた。

こうして「客観的な事実」である情報や統計を集め、それに基づいて政策を立案するパターンが国家機構に急速に浸透してゆき、ポリスのためには、情報や統計を集める整序された政策管理機構を構築することが必須の前提条件とされていった。したがって、「政治算術」は絶対主義国家の中央集権化された官僚制度と結びついており、国家の独占的秘宝であった。実際に、統計

学は、17世紀のドイツの国家科学という考えから引き出されたものであり、ドイツ語の Statistik に由来する、と言われている。そのことばは1749年にゲッティンゲン大学教授のゴットフリート・アッシェンヴァール (Gottfried Aschenwall) によって初めて使われており、アッシェンヴァールの Statistik やヘルマン・コンリンク (Herman Conring) の Staatenkunde という考えでは、国家の体系的な研究を進めるためには、人口に関するさまざまな事実を集め、図表にすることが求められていた。もちろん、これらの事実はおそらく数量化された形でのみ表されたものではなかったが、統計や国勢調査と国家学は切っても切れない関係にあったのである⁶。

行政国家の出現 — 政治と行政との分離

イギリスの史家であるジョイスは、近代都市トリベラリズムとの関連を論じた近著において、こう述べている。1820年代から1840年代にかけて、工業化や都市化がひきおこした社会的混乱のなかで、政治家はこの国の将来にひどくとまどいを見せており、その行末に自信をもてずにいた。旧い統治の技法はもはや命運が尽きており、それに代わって新たな統治の技法が求められており、政治家は新たな機構を模索しつつあった。18世紀には政治家は後に「行政」と称されることになるしごとを行っており、行政官自体も明確な政治的機能と権限を有していた。だが、1780年代以降、君主による統治という考えがすたれるにしたがい、統治と政治との間に明確な一線が引かれ、統治は政治から独立した「行政」のなかに位置づけられるようになった。政治権力が王権から切り離されたこととの類比で語るならば、「行政」が政治から切り離された、とも言えよう。こうして「行政」機能を担う国家は「政治」から切り離され、「行政」は次第に明瞭な形をとるようになっていき、固有の領域と機能をもつようになった。この過程で政治的なものが否定的意味合いをおびる一方、「行政」は政治から独立したものであり、中立である、と自らの存在の正当性を主張するようになった。言うならば、法的国家から行政国家へ

の転換がはかられたわけである。「行政」が政治から切り離される過程と軌を一にして、行政国家を担う近代的公務員・専門職が出現し、公務員・専門職が政治にとって代わっていくことになる⁷。

専門家、公務員の出現

ウェーバーは、官僚制の出現とともに形成された、官僚のための新しいエートスに触れてこう述べている。「私経済における職務もまたそうであるが、職務に就くということは、安定した生活を与えられることと引き換えに、職務への特殊な忠誠義務を受け入れたものとみなされる。職務に対する近代的な忠誠というのは、その純粋な形では、封建的または世襲財産制的権威のもとで封建家臣や従者が忠誠を誓うように、ひとりの人に対する関係を結ぶのではなく、非個人的な、あるいは機能的な目的に専心するということが、それにとって決定的なことである。」⁸ 公務員としての職務自体は「天職」(Beruf)となり、倫理的献身をし、個人的道徳的熱狂を拒否し、職務目的へと献身し、それを義務として果たすことが求められるようになった。また、その他の具体的特徴として、上位・下位の官庁秩序を認めること、「ファイル」制度あるいは情報を記し処理すること、その職務に就くには専門技術の長期にわたる訓練が必要であり、一般には公的試験で資格が認定されなければならないこと、職務日常業務は厳格な手順に則って管理され、手順への厳格な忠誠を尽くすこと。さらに、終身地位の保有が保証され、退職後は恩給が支給されることなどを挙げている⁹。19世紀の行政国家では、こうした官僚エートスは、その倫理的ふるまいを問題構成し、訓練制度を通して内面に注入されるようになった¹⁰。現在ではこのような官僚エートスに対して肯定的評価が下されることは少ないが、そういうエートスの所有者が時代の節目で大きな役割を果たしたのである。後に触れることになるが、19世紀前半の教育についてもまたそうであった。ネオ・マルクス主義的な解釈によれば、この期に活躍したケイをはじめとする専門家や官僚は、民衆教育への国家関与を求める中産

階級のイデオロギーによって繰られており、否定されるべき存在であった。それにとって代わるべきは労働者階級による自己実現をめざす内省的人間像であり、歴史上も、その実現が約束されているし、また私たちはそれをめざすべきであるとされる。したがって、官僚特有のそういうエートスの没価値性や道徳性は、ネオ・マルクス主義の信奉する教育理念の高みからすれば、けしからぬものであり、断罪されるべきものであった。だが、そういう立場から見ると、自らの教育理念にひきずられて、専門職、公務員、官僚の役割を見誤るおそれがあり、議論は不毛なものとなるであろう¹¹。

ところで、ハッキングが言うように、ヨーロッパでは過去2世紀にわたって、生を管理しようとする政治的試みがなされ、数量に対する熱狂を巻き起こし、数値がさまざまな報告書、パンフレットなどに印刷され、それが雨霰となって私たちの間に降り注いでいた¹²。そのような潮流のなかで、官僚や公務員は「事実」を収集し、それを政策へと活かすという、統計への熱狂を煽るとともに、熱狂を国家機構のなかに導き入れ、統治に役立てようとしていた。教育についてもこの例外ではなかった。1830年代には統計への熱狂が巻き起こり、私たちの手元にはおびただしい冊数のブルーブックが残されている。すでに述べたように、1816年の議会特別委員会を手始めに、1830年代には数度にわたり特別委員会が組織され、報告書そして統計を残している¹³。1839年には、イギリスの教育行政史上で画期をなすと言える、枢密院教育委員会が国庫補助金の分配を監視するために組織され、ケイが初代事務局長として就任することになった。そのもとに勅任視学官が置かれ、次第に人員を増やし、1850年には23名にも達した。当初はとくに決められた行政的責務がなかったこともあって、彼らは全国規模で各地域の教育状況や学校を視察し、その報告書をしたため、政策を方向づける情報や統計を多くもたらした¹⁴。専門家や公務員は教育あるいは学校を情報や統計として表象することによって、教育あるいは学校を社会問題として構成することに大きく寄与したのである。

リベラルな統治

しかし、このような形態での統治は一時代前の国家による独占的統治とは様相を異にしていた。伝統的な統治概念では、国家は権力を独占しており、統治対象に対してその外部から抑圧的に権力を行使するとみなされていた。だが、国家の中心から離れており、その結果、権力の行使が直接には及ばない出来事や現象に対しては、いかにして統治を広めることができるのだろうか。それが19世紀には大きな統治課題となってきて、ここにリベラルな統治という課題が姿を現わすことになる。すでに触れたように、19世紀前半のイギリスでは、情報や統計にもとづいて「事実」を確定し、「社会」問題を構成しようとする流れがあった。その流れを担っていたのは、ケイをはじめとする医者や聖職者たちであり、彼らは国家の外部で率先して情報や統計を集め、「社会」問題を構成するのに多大な貢献をしていた。この流れのなかでは、統治と知の関係は、伝統的統治概念とは対照的に、よりリベラルな形をとり始める。「イギリスやそのほかの国での統計は、それが表現しようとした「市民社会」そのものを構築するのを手助けした。統計は社会的なもの（the social）の法則を暴き、社会的なものへの知識は正しい統治がなされるようにし、その統治は社会の「自然な」自己規制を尊重し、統治がそこから「遠くに」あるようにする。「社会科学」自体は数や「社会事実」によってこの新しい思考方法との密接な関連を持って成長した。統計は市民社会のなかで出現したが、国家権力を廃止するのではなく、新しい方法で高めたのである。」¹⁵

統計協会の創設とそのメンバー

この時期は「統計の時代」とも称されているように、統計や数字に対する一種の熱狂が巻き起こり、教育はもちろんのこと、人間の誕生から死に至るまでの出来事や現象が記録され、数え上げられるに至った時代であった。その熱狂は一過性のものでもなく、無色透明なものでもなかった。また統計や

数字は現実をイデオロギーによって歪曲しながらも反映させたものでもなかった。というよりも、現実を情報や統計という形で表象することで、統治の問題を構成する技法であった。ともあれ少し具体的にこのことを見てみよう。

官僚や公務員は統計への熱狂を煽るとともに、そのような潮流を国家機構のなかに導き入れたが、彼らはロンドンや地方の統計協会、そして中央教育協会 (Central Society of Education) のような「改革」グループ、そして当時の改革潮流と緊密な関係を保っていた。統計への熱狂が現実形をなしたのが統計協会であり、そのなかでも特に顕著な活動を繰り広げたのが、ロンドンとマンチェスターの協会である。ロンドン統計協会はイギリス学術振興協会 (the British Association for the Advancement of Science) の統計部門に起源を持ち、そこから派生して創設されたものであるが、チャールズ・バベッジやトーマス・マルサスらを筆頭とする、当時の政治的知識人の多くがそこを活躍の場としていた。

マンチェスター統計協会はロンドン統計協会に先立つ1833年に創設されたが、世界初の統計協会として知られている。ロンドン統計協会を除くと、統計協会としてはその活動が最も活発で、かつ重要であり続けた、と言われている。その協会のメンバーは都市の主導的産業家や銀行家から構成されており、それに著名な医者が加わっていた。そして、これもよく知られていることだが、マンチェスター統計協会の経理を担当し、1830年代にマンチェスター衛生委員会の事務局長を務めたのがジェイムズ・ケイ、のちに枢密院教育局の初代事務局長となるケイ・シャトルワースその人であった。ケイはもちろんのことだが、その協会に集った人々には好事家的な統計愛好者は見あたらず、彼らは自らを「産業ジェントルマン」と称していた。1834年の協会の最初の報告書では、そのメンバーは「私的な集まりでよく顔を合わせる紳士たちで、その人たちの習慣や意見は合致していた。心地よい社会的な交流という魅力でもって、メンバーをできる限り緊密に結び合わすことが望ましいと考えられた。こうして、毎月集まることが決められた。」¹⁶と述べられて

いた。

統計協会を突き動かしたのは階級や党派ではない

だが、ジョイスが言うには、統計協会へと馳せ参じた人々を、一つの階級として、たとえばブルジョア階級として一括りにすることは、いささか無理がある。彼ら自身もまた自分たちのことを一つの階級とはみなしてはおらず、「裕福な階級 (opulent class)」あるいは都市の「富裕で影響力を持っている住人」と規定していた¹⁷。彼らは確かに社会に影響力を及ぼすことができたが、それはイデオロギーを介して階級的あるいは党派的な意志を人々や社会に押しつけることによってではなく、あくまでも「党派的政治を全面的に排除する¹⁸」ことを前提としていた。

イギリス学術振興会の新しい部局は、ロンドン統計協会の母体となったものであるが、統計という数量化以外に調査方法の選択肢はまったく考えていなかった。振興会が主張するには、その調査は「単なる抽象や数値結果であらわされる事実ということがら」に限定すべきであったし、政治経済学や政治哲学の「高度な一般化」は禁じられていた¹⁹。ロンドン統計協会の創設者のひとりであるリチャード・ジョーンズ (Richard Jones) は、そのメンバーのなかで最もイデオロギー色が薄く、統計データを集め、整理していくことに熱心であり、1833年にはロンドンのキングス・カレッジの政治経済学の教授の椅子についたが、彼によれば、わき上がった統計運動の背後にあった精神とは、「よく練られていない未熟な考えは、しばしばそのような事実調査と未熟な考えを同じものだと混同しがちであるが、ある程度そういうことを抑えるために、ことがらの受容をできるかぎり数量によって表現できることに限定することが賢明である²⁰」というものであった。こうして「党派的精神」を全面的に排除し、中立的そして客観的と見なされる数量化が導入されることになる。

ロンドン統計協会の評議会は、次のような一般原則を公表している。

「統計学は政治経済学とは異なる。なぜなら、統計学はそれと同じ目的をもつものであるが、統計学は原因について論じないし、起こりうる結果について推論することもないからである。統計学は、社会的、および政治的統治に関する正しい結論の基礎を形成しうるだけである諸事実を収集し、整理し、そして比較しようとしているだけである。……

他の諸科学と同様に、統計学は確実な諸事実から人類に利益をもたらす、そして影響を与える確かな一般の原理を演繹しようとしているのである。統計学は、比較、計算、そして演繹という〔政治経済学と〕同一の用具を用いる。しかし、統計学の特殊性は、それはもっぱら諸事実を蓄積し、比較することによって考察を進めてゆくのであって、いかなる種類の思弁も認めないということにある。」²¹

ロンドン統計協会の創設時のメンバーが掲げた目的は、社会政策上で役立つ情報であり、知識であった。それもできる限り、数量的に表すことができ、図表にできる事実が求められていた。マンチェスター統計協会の目的もまた「事実の収集」に求められていた²²。「党派的精神」をいっさい拒絶し、数量化に頼った理由は、ポーターが言うには、防衛的動機から発しているのか、あるいは利害関係のある政治的リーダーたちが統計学を支持したにしても、彼らに迷惑が及ばないことを保証するためであった²³。他方、カレンのことばによれば、階級による支配という見地から、「フレッチャーや他の統計家はプロパガンダを事実として偽って提示した。教育の目的は一つの階級を他の階級の価値システムへと転換することであった²⁴。」いずれの主張も議論の余地を多く残しているが、ともあれ、統計家たちは過度な思弁にはしることを自ら諫め、もっぱら事実のみ関わるという立場に自らを限定していた。

1830年代の調査——統計数値が分類枠を生じさせた

1830年代のマンチェスター統計協会のメンバーは、統計調査を実施する以

前にすでに認知されていた社会カテゴリー、すなわち「労働者階級(the working classes)」、「工業地域(the Manufacturing Districts)」へとその関心を集中させた。情報を収集するために「労働者階級」との接点をもつ有給のエージェントを雇い、彼らが労働者階級の人々の口から直接証言を得るという方法を採用し、きわめて経験的そして試行錯誤をしながら、その職務に取り組んでいた。彼らが手にした大衆のきわめてありふれた日常生活——出生、結婚、疾病、死亡数とその原因、自殺、犯罪タイプと地理的分布、「国民経済」²⁵、「貧困」²⁶そして「教育」、「学校」など——が記録に残される対象となった。統計、国勢調査、調査や貧民の生活を探查する新しいジャンルを介して、証言が書き留められ、事実が数え上げられ、表にされ、グラフにされ、描かれ、大衆の日常生活が理解可能な形で表象されるようになった。人口はそのさまざまな特徴が数え上げられ、書き記され、蓄積され、格子状に分類され、他の一連の統計と比較され、関連づけられて、それ自身の法則性をもった認知可能な実体あるいはプロセスとして書き記されていった²⁷。

統計運動の焦点となっていたのは、よく知られているように、公衆衛生と教育の二つの領域であった。この時期は「教育」についての言説も揺らいでおり、いかにしてそれを構築していくかが時の課題であった。医者、教師、慈善家、警察は、都市の空間をさらにいっそう統計的に特徴づけ、地図として描くことになった。こうして都市はそれ自身の特徴と結果を住民にもたらず領域として描かれ、^{トポグラフィ}道徳地誌が形づくられるようになった²⁸。とくに教育は都市化、移民、犯罪、疾病などと関連させ、社会的視点でとらえられ、道徳領域として問題構成されていった。統計運動のなかでは、教育は「道徳統計」として編み上げられ、しばしば犯罪と関係づけられ、その両者は関連性をもっているのか否かを巡って激しい議論の応酬がなされていた²⁹。だが、ここでの関心から言うと、関連の真偽について一定の結論をみることはむしろかきである。というのは、「事実」にもとづいて、その関連性の真偽を問うよりも、教育や学校がいかにして問題として構成されたかを問うことの方が実りあるアプローチとなる、と考えているからである。ともあれ、統計家や

調査者は道德統計を集め、それを分析することで、その法則性を明らかにすることへと邁進していた。彼らを駆り立てていたのは、労働者や貧民のふるまいや行動には法則性があり、教育を含めた道德領域は自然界と同じように理解でき、道德領域は、自然自体と同様に、それ自身固有の内在的法則によって支配されている、という考えであった。道德領域は教育とその他の要因との関連をめぐって議論を巻き起こした領域であり、かつては外部の倫理的あるいは神学的原則によって正当化されたものであったが、こうして、明証性をもつ実在と考えられるようになった。道德領域が情報や統計を介してそれ自体の法則性をもつ実在へと転換することで、それは認識し理解することが可能なものへと転換できたのである。

私たちはしばしばこう考えがちである。数え上げ、書き記すことは、言いかえれば情報や統計は、すでに客観的に存在している所与の現実を、中立の立場で表象し、知識や数値に変換するものであり、統計数値は所与の社会的世界、当時は「社会的事実」と呼ばれた世界の「自然な」作用を客観的に確証するものである、と。確かに、情報や統計は社会がどのような特徴をもち、どのような法則によって規定されているのか、ということを確認するのに大いに手助けとなった。そのことは紛れもない事実である。だが、出来事や現象そのものはいかにして出来事や現象が理解され、それに対してどのような対応がなされるべきかを自動的に決定することはない。出来事や現象を問題として再構成することは、統計として数え上げ、情報として書き記すという営為から生じたのである。数え上げ、書き記すことではじめて、出来事や現象は人間によって理解可能で、思考可能で、計算できる現象へと転換されたのである。また、情報や統計を集め、累積し、相互に比較していく作業は、ある種の分類されたカテゴリーを生じさせていく。こうして、ある種の内的同一性と外的な境界を伴った近代のカテゴリーがつくりあげられていき、そのカテゴリーに規定され、その内部で人の思考と行動は生じるようになる³⁰。私たちはこのような近代のカテゴリーでもって人間とその活動について、あるいは社会について考えるが、それは情報や統計を収集する試みに起源を

持っていたことになる。事実を書き記し、蓄積することは、現実を可動的にし、比較できるようにし、また結合できるようにさせる。それをもとに分析、診断が可能になり、互いに議論できる形態をとるようになる。だから、国勢調査、統計協会はもちろんのこと、工場査察官や視学官あるいは各種委員会を構成する公務員や官僚が、出来事や現象を書き記し、統計数値を集めることで、世界を情報や統計に変換し、分類分けをし、人々が自分たち自身や社会をそのカテゴリーにもとづいて考えるように導くことで、混沌とした偶然をてなづけ、統治に適するようにしたのである。情報や統計数値を集めることは、一見すると現実を表象し、情報のみを提供しているかのようにも見える。だが、情報として書き記し、統計として数え上げる技法はけっして統治とは無関係ではなく、また中立なものでもなく、それと緊密に結びつき、権力テクノロジーの一部として編み込まれていたものである。こういう作業は、それ自体現実に関与する技法のひとつであり、問題となっている領域を数量や情報に転換し、評価可能にし、関与可能なものにする権力テクノロジーのひとつであった。事件や現象を書き記し、統計数値に変換し、蓄積し、比較するという新たなテクノロジーを介してはじめて、大衆のきわめてありふれた日常生活が問題として構成され、専門家による改革あるいは防止のための提案や戦略の対象となることができたのである。こうして、新しいリベラルな形態の統治権力が権力を行使する人々と行使される人々との間に持ち込まれることになった。

リベラルな統治 — 「科学」の役割

繰り返しを怖れずに言えば、リベラルな統治形態においては、独占的に権力を握っている国家が外部から人間に対してある種の行動を強いる、とはもはや考えることができない。国家が一元的に権力を握っているのではなく、一見するときわめてありふれたことであるが、出来事や現象を情報や数値に転換することが統治に力を貸すことになったのである。公的な情報そして統

計数値は二つの点で新しいリベラルな形態の統治権力の行使に大きな役割を果たすこととなった。

第一に、情報や統計数値は客観的な事実を表象したものであり、それ自体は自然な作用を確証したものであり、真理である、と語ることで、統治の問題を政治の領域から排除し、中立的で無色透明な「科学」の問題として語る事が可能になった。その結果、教育を含めてであるが、対象となった領域は政治的な介入から解き放たれ、自由になり、独立した領域と考えられるようになった。このことを行政機構という側面から見れば、情報や統計を集め、客観的な事実のもとに行政を構築するのに力あったのが、官僚制である。教育を統治という視点から分析したハンターによれば、官僚制のなかで形成された、個人の恣意的意志を遮断した専門家的行動がなかったならば、一九世紀前半の宗教的熱狂に駆られた国教会と非国教会との政治的争いから、学校教育を引き離し、それを行政的解決に開かれた統治の問題として組織することは不可能であったろう。権力を掌握している人々の恣意的意志から、あるいは宗派的争いから、教育「行政」を引き離し、統治の緊急性を統計調査や手順に則った分析という技術的な解決へと開かれた統治の問題として構成することが、官僚制の出現ではじめて実現したのである。ケイをはじめとする専門家の役割はここにあったとも言えよう³¹。

第二に、統治の対象はそれ自身の法則性という自然的特徴をもっている領域として考えられるようになり、情報や統計が統治に必要な知識を生産するための鍵を提供することになった。言いかえれば、統治の問題を政治の領域からはずし、「科学」の問題として語る事ができるようになった。こうしてリベラルな統治は社会的な領域、社会自体から個々の自己にまでわたる「自然な」領域を規定し、それらを理解することをいっそう押し進めることとなった³²。権力／知の関係とでもいうものである。イギリスとヨーロッパでは、数値化はリベラルな統治には決定的であり、政治経済学、社会学、医学、心理学などの実証科学の成立のための可能性の条件を構成することにもなっていく。エイブラハムズは1830年代にイギリス経験社会学の起源を求めている

が、人口統計学デモグラフィと貧困の社会学ともいうべきものがそれである。彼によれば、総じてヴィクトリア朝の統計学者はフィールド・スタディの必要性をそれほど感じておらず、彼らの研究はもっぱら官僚・行政官からかき集めた素材に頼っており、したがって、彼らが発見したものは統計との関連から推察されたものである³³。

自然界の法則と同様に社会にも、そして道徳にも法則があるという主張がいつそう押し進められ、理論的方向へと向かっていった。教育に引きつけてこのことを考えてみると、私たちが自明視している近代のカテゴリー、たとえば「子ども」や「精神」もまたこの関係の網の目が生み出したものである、とも言えよう。フーコーの『監獄の誕生』によれば、個人は所与のものではなく、個人は問題として構成されることによってはじめて、生み出されるものであった。19世紀においては、問題構成されたのはそれ以前の時代とは異なり、もはや専制君主ではなく、犯罪人であり、狂人であり、患者であり、そして子どもであった。だから、個人、そしてその特徴を数え上げ、書き記し、計算可能な者へと変換することは、隠蔽し、抑圧する、抑えつけるという権力テクノロジーでしかない、と考えるべきではない。それらの技法は自分自身の活動や他の人の活動を考えたり、計算したり、予測したり判断したりする一連の方法を持った計算する自己へと個人をするものであった。だから、数えること、あるいは数えられることは「対象化」するだけではない。それは自らを関連づけるひとつの方法として、人間にたいしてある種のアイデンティティを与えるものであった。それらは自律化そして責任化のテクノロジーでもある。「知性」や「パーソナリティ」はそれらのテクニックと緊密に結びついているものである³⁴。とすれば、心理学、そして教育学のあり方こそが問われなければならないはずである³⁵。

私たちはここまで、1830年代に教育が語られたことを、いかにして教育が問題として構成されたか、という視点からいささか粗いスケッチを試みてきた。最後に触れた「教育学」の出現は、統治の問題を抜きにして考えることはできないが、あえて統治ということばにこだわれば、自己による自己の統

治という技法のなかで生まれでたものであろう。その道筋を辿るためには、いっそうありふれた日常的な教育の風景、教師一生徒関係、授業などへと立ち戻らなければならないであろう。

註

- 1 本稿を書くにあたって Nikolas Rose, *The Psychological Complex: Psychology, Politics and Society in England 1869-1939*, 1985 以降, *Powers of Freedom*, 1999 に至る一連の著作に負うところが多い。
- 2 たとえば M.Goldstrom, 'Education in England and Wales in 1851, the Education Census of Great Britain, 1851', in Richard Lawton (ed.), *The Census and Social Structure*, 1978 参照。
- 3 N.Rose, *Powers of Freedom*, p.210.
- 4 Pasquale Pasquino, 'Theatrum politicum: The genealogy of capital-police and the state of prosperity', in Graham Burchell, Colin Gordon and Peter Miller (eds.), *The Foucault Effect*, 1991.
- 5 M.Foucault, *Governmentality*, in *The Foucault Effect*, T.M.ポーター, 長屋政勝訳『統計学と社会認識』梓出版社, 1995 年, 20 頁以下参照。
- 6 18 世紀のドイツにおける統計の系譜については, Ian Hacking, *The Taming of Chance*, 1990, pp.22-4 (石原英樹, 重田園江訳『偶然を飼いならす: 統計学と第二次科学革命』木鐸社, 1999) 参照。また M.J.Cullen, *The Statistical Movement in Early Victorian Britain*, 1975 のなかでも議論がなされている。ポーターによれば「統計学ということばを選んだことは, おそらく不幸なことであつたであろう。というのは, その語源の意味は不明確であり, その定義をめぐって一世紀以上にもわたって論争が続けられたからである。19 世紀初めのほとんどの研究者がそれは本質的に国家と関わりがあること, あるいは少なくとも「統計家」が知っているべきことがらと関わりがあるということを認めてはいたが, その固有の対象についてさえ論争されたのである。」(ポーター, 前掲訳書, 26 頁)「このドイツ語の用語の英語化された形は, ジョン・シンクレアによつてもち込まれた。彼は, 21 巻からなる『スコットランドの統計的説明』(*Statistical Account of Scotland*) を共同作業で編纂した長老教会派の牧師たちの連絡網の中心人物であつた。シンクレアは, 彼の計画が注目を浴びるようにと意図的にこの外国語の表現を取り入れたと述べているが, 彼はドイツ人の仕事は「政治的な強さ」や「国家の事情」を取り扱っているのに対して, 彼の研究は一国の住民たちが享受している「幸福の大きさ」(quantum of happiness) や「それを改善していく方策」(the means of its future improvement) を確かめるために行なわれたのであるとして, 自分の仕事とドイツ人の仕事とを区別しようとしている。」(同上訳書, 26 頁)
- 7 Patrick Joyce, *The Rule of Freedom*, 2003, pp.103, 112.
- 8 世良晃志郎訳『支配の社会学 I』創文社, 1960 年, 64 頁。

- 9 世良晃志郎訳『支配の類型学』創文社, 1970年, 世良晃志郎訳『支配の社会学 I』創文社, 1960年, 武藤一雄, 藪田宗人, 藪田担訳『宗教社会学』創文社, 1976年, 世良晃志郎訳『法社会学』創文社, 1974年, 中村貞二, 山田高生訳「新秩序ドイツの議会と政府——官僚制度と政党的批判——」ウェーバー『政治・社会論集』河出書房新社, 1988所収などを参照。
- 10 何世紀にもわたって, 権威が権威あるものとなるためには, 統治を行なう人々が倫理的に形成されていなければならなかった。その統治権威が問題として構成されたところでは, 権威を所有している人々の倫理的ふるまいが作りなおされなければならなかった。統治を行なう人は, 自己自制や克己という形で, まずもって自らに権威を行使できることを示す必要があった。ゲルハルト・エストライヒが述べているところによると, 16, 17世紀のヨーロッパのネオ・ストイシズム倫理の勃興は, 高位を占める人は克己と自制の内面的資質を涵養しなければならぬことを伴っていた(「ポリツァイと政治的叡智」(千葉徳夫訳)坂口修平他編訳『近代国家の形成—新ストア主義・身分制・ポリツァイ』(創文社, 1993年)所収)。
- 11 Ian Hunter, *Rethinking the School; Subjectivity, bureaucracy, criticism*, 1994.
- 12 'How should we do the history of statistics?' in *The Foucault Effect*.
- 13 *Reports from Select Committees on Popular Education in England and Wales, with Appendices and indices, 1834-1838*.
- 14 *Minutes of the Committee of Council on Education, 1839-*, E.L.Edmonds, *The School Inspector*, 1962.
- 15 Patrick Joyce, *op. cit.*, p.24.
- 16 *The Rules of the Manchester Statistical Society*, 19 Nov. 1834, quoted in Patrick Joyce, *op. cit.*, p.29.
- 17 Patrick Joyce, *Democratic Subjects: The Self and the Social in Nineteenth-Century England.*, 1994.
- 18 *First Report of the Statistical Society, Manchester*, July 1834.
- 19 *Lithographed signatures of the members who met at Cambridge*, p.90, quoted in M.J.Cullen, *op. cit.*, pp.82-83.
- 20 *Diary*, quoted in M.J.Cullen, *op. cit.*, p.82.
- 21 *Introduction, Journal of the Statistical Society of London*, 1838, pp.1, 3.
- 22 マンチェスター統計協会の目的は「社会状態を表す事実を集め, 社会・政治経済の問題を議論し, 全面的に党派的政治を排除すること」(*Appendix to the Minutes of the Manchester Statistical Society, frontispiece*, quoted in M. J. Cullen, *op. cit.*, p.110)とされていた。
- 23 ポーター, 前掲訳書, 38頁。
- 24 M. J. Cullen, *op. cit.*, p.144.
- 25 政治経済学は「事実」を追求した。19世紀の思想史では自由放任への強調は政治経済学のこの傾向を覆い隠した。「そのイデオロギーの真の政治的結果は二重である。人間の生活を社会の自然の法則と一致させるためのシステマティックな関与, そしてこれらの法則がすでにうまくはたらいっているところでは不関与であった。必要であったものは自由放任の政府や関与主義的な政府ではなく, 情報をもった (informed) 政府であった。……政治経済学者の役割は政府に対する前例を見ない知的な機能を遂行する役割であった。彼らが主張したものは事実であ

- る。そしてより多くの事実であった。」「1830年までに、議論の連鎖は明確になった。不一致が累積されるにつれ、事実への欲求が増し、情報が議論の震を追いやるとの信念」が確固となり、数量的統計へとよりいっそう向かうようになった。」(Philip Abrahams, *The Origins of British Sociology: 1834-1914*, pp.9-12.)
- 26 Giovanna Procacci, 'Social Economy and the Government of Poverty', in *The Foucault Effect*.
- 27 プロウカッシはそのことの優れた概観を提供してくれているし、エイブラハム(Philip Abrahams, *op. cit.*)のイギリス経験社会学の歴史は興味深い素材を提供している。また、ハッキングの『偶然を飼い慣らす』前掲訳書はその最良の導入となっている。
- 28 Karen Jones and Kevin Williamson, 'The Birth of the Schoolroom', *Ideology and Consciousness*, vol. 6, 1979 は、イギリスではじめてフーコーの系譜学を教育に適用したものであり、そのなかでは19世紀前半の貧民教育がいかにして地誌として描かれ、問題として構成されたかが示されている。
- 29 1833年にフランス人のグリー(A.M.Guerry)は当時のイギリスの統計的手法よりも精緻で優れた方法を用いて、教育は犯罪を減少させはしない、との主張をした。それ以降は統計家は直接あるいは間接のちがいはあるが、その議論へと言及するのが当然のこととされた。この議論は1850年代初頭まで続くことになる。
- 30 私たちの関心から言えば、「教育」や「学校」もこの期には明確なカテゴリーとしては定まっていなかったのであり、「教育」や「学校」にどのような意味合いを込めるかの争いが繰り返られていた、とも言えよう。ドナルド(James Donald, 'Beacons of the future: schooling, subjection and subjectification', in Veronica Beechy and James Donald (eds.), *Subjectivity and Social Relations*, 1985) は、「教育」という言葉にいかなる意味を込めるか、という戦いの場であったとこの時代を特徴づけている。
- 31 I. Hunter, *op. cit.* 国家による関与がきわめて遅々として進まなかった点をとらえて、それをイギリス公教育の「後進性」と考える論もあるが、リベラルな統治という視点から言うと、必ずしもそうとは言えない。
- 32 Patrick Joyce, *op. cit.*, pp.24-6.
- 33 Philip Abrahams, *op. cit.*, p.20. やがて、統計学者は1830年代の素朴で純粋な経験主義のレベルではものごとは探求できないことを認めざるを得なかった。その困難さは協会のジャーナルに掲載されたケイの論文で明らかになった。ケイが主張していることは、もっぱらデータに基づき、そこから導き出されたわけではなく、ある種の先験的な考えに依拠したものであった。結局のところ、多くの人を社会調査へと駆り立てたのは良いことをするという伝統的な責任感であった。
- 34 N. Rose, *Powers of Freedom*, pp.213-4,224.
- 35 「精神は一つの幻影、あるいは観念形態の一つの結果である、などと言ってはなるまい。反対にこう言わねばならないだろう、精神は実在する、それは一つの実在性をもっている。しかも精神は、身体のまわりで、その表面で、その内部で、権力の作用によって生み出されるのであり、その権力こそは、罰せられる人々に—より一般的には、監視され訓練され矯正される人々に、狂人・幼児・小学生・被植民者に、ある生産装置にしばりつけられて生存中ずっと監督される人々に行使されるのだと。この精神の歴史的実在性がある、と言うのも、この精神は、キ

リスト教神学によって表象される意味での精神とは異なり、生まれつき罪を犯して罰せられるべきだと言うわけではなく、むしろ、処罰・監視・懲罰・束縛などの手続から生まれ出ているからである。実在的な、だが身体不関与のこの精神はまったく実質的ではない。ある種の型の権力の成果と、ある知の指示関連とが有機的に結びついている構成要素こそが、しかも、権力の諸関連が在りうべき知をさそい出す場合の、また、知が権力の諸成果を導いて強化する場合の装置こそが、実は精神の姿である。……人々がわれわれに話しているその人間像こそは、すでにそれじたいにおいて、その人間像よりもはるかに深部で営まれる服従 [= 臣民] 化の成果なのである。ある一つの《精神》がこの人間像に住みつき、それを實在にまで高める、だが、この實在それじたいは、権力が身体にふるう支配のなかの一つの断片なのだ。ある政治解剖の成果にして道具たる精神、そして、身体の監獄たる精神。」(M.フーコー、田村俣訳『監獄の誕生—監視と処罰』新潮社、1977年、33-34頁。)